

◆連載

いま留萌をかし

●みなと留萌の誕生(三)

千望台から、眼下に広がる

留萌の港と市街地を見おろし、今でも留萌の行く末を見守り続ける一人の男がいる。その男を「五十嵐億太郎」と言う。

現在の留萌の繁栄はこの男なくしては語ることができない。億太郎は留萌がルルモツペから留萌に改まってからまだ間もない明治六年、青森県下北郡風間浦村下風呂に佐賀庄四郎の五男として生まれた。

佐賀家はその先祖を肥前佐賀の鍋島藩龍造寺家につながり有名な猫騒動で下北に移住したという。江戸時代には南部藩の御用達を命ぜられていた家柄である。弘化元年(一八四四)、八代目平之丞のとき留萌の礼受到にニシン網を入れ礼受の漁場開拓の初めとなった。現在の「カクダイ佐賀」である。億太郎はこの留萌の佐賀の支配人をしてきた庄四郎の子であり、生まれついて留萌とは切っても切れぬ縁で結ばれていたらしい。

明治一二年(一八七九)億太郎は留萌の五十嵐綱治の養子となる。そのころ、五十嵐家は江戸時代から留萌地方に大きな力を誇っていた栖原家の支配人をしており、明治十三年栖原から独立するやいなや留萌から天塩沿岸にかけてのなかでも随一の資産家になっていた。また、綱治は億太郎より七歳歳上の姉スワを正妻に迎えていた。

明治二十年(一八八七)英人C・S・メークが留萌に立ち寄り港の調査を行った。この時メーク一行は五十嵐家に滞在したらしい。そのときから五十嵐家は留萌の港づくりのために奔走することとなる。綱治等は有志と図り、明治二十四年第二回帝国議会で留萌築港の請願を行った。その願末は第一回に記したとおりである。その間億太郎は水産講習所に学び、多くの人材と交わり、その後の活動の基礎をつくったと言われる。

明治二十年(一八八七)英人C・S・メークが留萌に立ち寄り港の調査を行った。この時メーク一行は五十嵐家に滞在したらしい。そのときから五十嵐家は留萌の港づくりのために奔走することとなる。綱治等は有志と図り、明治二十四年第二回帝国議会で留萌築港の請願を行った。その願末は第一回に記したとおりである。その間億太郎は水産講習所に学び、多くの人材と交わり、その後の活動の基礎をつくったと言われる。

明治二十年(一八八七)英人C・S・メークが留萌に立ち寄り港の調査を行った。この時メーク一行は五十嵐家に滞在したらしい。そのときから五十嵐家は留萌の港づくりのために奔走することとなる。綱治等は有志と図り、明治二十四年第二回帝国議会で留萌築港の請願を行った。その願末は第一回に記したとおりである。その間億太郎は水産講習所に学び、多くの人材と交わり、その後の活動の基礎をつくったと言われる。

明治二十年(一八八七)英人C・S・メークが留萌に立ち寄り港の調査を行った。この時メーク一行は五十嵐家に滞在したらしい。そのときから五十嵐家は留萌の港づくりのために奔走することとなる。綱治等は有志と図り、明治二十四年第二回帝国議会で留萌築港の請願を行った。その願末は第一回に記したとおりである。その間億太郎は水産講習所に学び、多くの人材と交わり、その後の活動の基礎をつくったと言われる。

明治二十年(一八八七)英人C・S・メークが留萌に立ち寄り港の調査を行った。この時メーク一行は五十嵐家に滞在したらしい。そのときから五十嵐家は留萌の港づくりのために奔走することとなる。綱治等は有志と図り、明治二十四年第二回帝国議会で留萌築港の請願を行った。その願末は第一回に記したとおりである。その間億太郎は水産講習所に学び、多くの人材と交わり、その後の活動の基礎をつくったと言われる。

明治二十年(一八八七)英人C・S・メークが留萌に立ち寄り港の調査を行った。この時メーク一行は五十嵐家に滞在したらしい。そのときから五十嵐家は留萌の港づくりのために奔走することとなる。綱治等は有志と図り、明治二十四年第二回帝国議会で留萌築港の請願を行った。その願末は第一回に記したとおりである。その間億太郎は水産講習所に学び、多くの人材と交わり、その後の活動の基礎をつくったと言われる。

明治二十年(一八八七)英人C・S・メークが留萌に立ち寄り港の調査を行った。この時メーク一行は五十嵐家に滞在したらしい。そのときから五十嵐家は留萌の港づくりのために奔走することとなる。綱治等は有志と図り、明治二十四年第二回帝国議会で留萌築港の請願を行った。その願末は第一回に記したとおりである。その間億太郎は水産講習所に学び、多くの人材と交わり、その後の活動の基礎をつくったと言われる。

明治二十年(一八八七)英人C・S・メークが留萌に立ち寄り港の調査を行った。この時メーク一行は五十嵐家に滞在したらしい。そのときから五十嵐家は留萌の港づくりのために奔走することとなる。綱治等は有志と図り、明治二十四年第二回帝国議会で留萌築港の請願を行った。その願末は第一回に記したとおりである。その間億太郎は水産講習所に学び、多くの人材と交わり、その後の活動の基礎をつくったと言われる。

明治二十年(一八八七)英人C・S・メークが留萌に立ち寄り港の調査を行った。この時メーク一行は五十嵐家に滞在したらしい。そのときから五十嵐家は留萌の港づくりのために奔走することとなる。綱治等は有志と図り、明治二十四年第二回帝国議会で留萌築港の請願を行った。その願末は第一回に記したとおりである。その間億太郎は水産講習所に学び、多くの人材と交わり、その後の活動の基礎をつくったと言われる。

てきたのである。この結果、明治四十三年に留萌築港が決定されるのである。

さらに、留萌港の将来を考え、後背地の産業振興とその条件整備に努めた。その運動費用はほとんどが自分で賄い、億太郎が亡くなってからは、五十嵐家の家運も衰えていったのである。

昭和四年留萌鉄道棧橋株式会社を創立した後、十二月二十九日出張先の大阪で永年の夢であった留萌港の完成を見ずにこの世を去った。奇しくも享年は養父綱治と同じ五十才であった。

それから四年後留萌港は完成する。



大正12年頃の留萌港内港と五十嵐億太郎